

## メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一 3:16~23 「あなたがたは神の神殿です」

[16]「あなたがたは神の神殿であり、神の御霊があなたがたに宿っておられることを知らないのですか」 「あなたがた」とはコリントのクリスチャンの群れ、教会のこと。つまりパウロは教会は神の神殿であると言っている。教会は同好会や趣味の集まりではない。神の御霊が宿る、神の臨在される神殿、それが教会なのである。それゆえ教会は、そのあるべき姿へ整えられ、成長していくことが大切。

[17]「もし、だれかが神の神殿をこわすなら、神がその人を滅ぼされます。神の神殿は聖なるものだからです。あなたがたがその神殿です」

もし、だれかが聖なるものである神の教会を肉の思いで分裂させたり、争ったりして破壊してしまうなら、神ご自身が、その人に罰をお与えになる。

[18-20]「だれも自分を欺いてはいけません。もしあなたがたの中で、自分は今の世の知者だと思ふ人がいたら、知者になるためには愚かになりなさい。なぜなら、この世の知恵は、神の御前では愚かだからです。こう書いてあります。『神は、知者どもを彼らの悪賢さの中で捕らえる。』また、次のようにも書いてあります。『主は、知者の論議を無益だと知っておられる』」

ここでは、この世的な知恵と、そこから来る誇り高ぶりが指摘されている。この世の知恵は神の前では愚か。→ I コリント1:20~21 パウロはコリント人に、自分は今の世の知者だなどと思い込み、そのようにふるまって自分を欺いてはならないと警告する。19節の引用は旧約のヨブ記5:13、20節の引用は詩篇94:11からである。これらのことばを引用することによって、この世の知恵が神の前ではいかに愚かであることを裏付けている。

[21-22]「ですから、だれも人間を誇ってはなりません。すべては、あなたがたのものです。パウロであれ、アポロであれ、ケバであれ、また世界であれ、いのちであれ、死であれ、また現在のものであれ、未来のものであれ、すべてあなたがたのものです」

人間を誇るとは、神の御霊が宿り、キリストにあってひとつとされ、神を礼拝すべき教会にあってはならないことであり、神の絶対的主権を無視することである。パウロは、神の働き人を私物化して争う者たちに向かって「すべてはあなたがたのもの」と大きく目を開かせる。また単に人間だけにとどまらず、「世界であれ、いのちであれ…」と続ける。これらすべては神のものであり、したがって神の子であるあなたがたのものである。ここで言う「いのち」とはイエス・キリストにある豊かないのち、充実した人生のこと。「死」とはキリストの十字架によって征服された死であり、もはや悲しみ恐れるものではなく、天国の門、栄光への出発点である。また「現在のもの」すなわち、今ある状態も、「未来のもの」といわれる輝かしい未来の可能性も、すべてあなたがたのものである。→ローマ8:16~17、32

[23]「そして、あなたがたはキリストのものであり、キリストは神のものです」

クリスチャンはキリストにあってすべてのものを持っているのであり、そのキリストは神のものである。ここでは三位一体の父なる神と子なる神キリストとの間に優劣がある

ということを行っているのではなく、キリストは、人間の罪を贖うというその職務上、父なる神に従属しておられるという意味である。

このようにキリストにあってすべてが与えられているクリスチャンが小さなことで争い分裂しているということは愚かなことである。コリント人は、そしてあらゆる時代のすべてのクリスチャンはこのことに気づき、あるべき姿に立ち返らなければならない。